

「同じこと繰り返してる」から脱却する契機としての施設移動：

薬物依存からの回復におけるワークの研究¹⁾

南 保輔

論文要旨

薬物依存からの回復は可能である。回復プロセスにおいて薬物を再使用することはふつうにある。回復支援施設ダルクの入寮者は、再使用をして施設移動となることがある。施設移動とどのようなワークからなっているか、これはどのように語られるか。これらの調査疑問を明らかにするため、4人の施設移動経験者にインタビュー調査を実施した。

3人からは「同じこと繰り返してる」に類する表現が聞かれた。施設移動を説得されるときに言われたり、薬物を再使用して解毒入院となるとき自身の気づきとしてであったり、ダルクにつながる気づきあるいは嘘をつくことをやめる理由として提示された。「同じこと繰り返してる」から脱却する契機として施設移動が位置づいていることがうかがわれた。

最後に、目標とする回復像としてダルクスタッフを挙げる事例を検討した。家庭人としても職業人としても安定している姿を「なりたい」姿として自分の回復のモデルとしていた。

キーワード：薬物依存、回復ワーク、ダルク、施設移動、ダルクスタッフ

1 はじめに

薬物依存からの回復は可能である。南たちのダルク研究会は、これまで数多くの薬物依存からの回復者にそのライフヒストリーを聞いてきた（ダルク研究会編 2013；南・中村・相良編 2018）。そのひとたちのあいだでは、回復を目指してダルクなどの施設につながってから一度も依存物質を使わなかったのはほんの一握りであり、大多数のひとには再使用の経験があった。

このように、回復にとって薬物やアルコールの使用と再使用はつきものである。エスノメソドロジストの David Sudnow は警察が対応する犯罪について多くは「通常の犯罪（normal crime）」であることを見出している（Sudnow 1965）。薬物依存からの回復者が薬物やアルコールを使用することを「スリップ」と言うが、同じようにスリップは「通常の（normal）」ことである。

問題は、再使用がとまらなくなることである。使用する量と頻度について「うまくやれる」と思って

1) 本論文は、成城大学特別研究助成による研究プロジェクト「薬物依存からの回復におけるワークの研究」（2021年度）の研究成果である。調査協力をいただいたみなさんに感謝する。なお、個人名などは匿名化している。

再度手を出すものの、「どうにもやめられなくなる」。そして人前で奇妙なふるまいをしたりして警察に逮捕されることになるか、そうではなくても精神科病院に入院して解毒治療を受けることになる。

ダルク (Drug Addiction Rehabilitation Center, DARC) は、薬物依存からの回復者のリハビリテーション施設を運営する団体である。ダルク入寮者が再使用をして精神科病院入院となった場合、退院するタイミングでほかのダルクへと施設移動となることが多い。入寮して回復に取り組んできたそれまでの環境ではうまくいかなかったとみなされるからだ。日本全国に 60 ほどのダルクがある。同じ「ダルク」を名乗り、自助グループである NA (ナルコティクスアノニマス) の 12 ステップを中心とする回復プログラムをおこなっているが、それぞれのダルクには個性もある。施設長のネットワークがあり、そのつながりで施設移動が決まる²⁾。

施設移動を経験した薬物依存者にその経緯についてインタビューしたところ、「同じこと」の繰り返しという表現が聞かれた。本論においては、この表現が施設移動とどのように関係づけて使用されるかに着目し、これを明らかにすることを目的とする。具体的には以下の 2 つの調査疑問を設定し、これに答えるかたちで論を進める。

- 1 施設移動はどのようなかたちを取るか。施設移動が決まる過程で「同じこと」の繰り返しという表現はどのように使われるか。
- 2 施設移動にともなう生活の変化とその帰結はどのようなものであるか。回復者はそれをどう語るのか。

3 節以降で 4 人の調査協力者の事例を提示して検討する。最終 7 節ではまとめと希求される回復像を論じる。

1-1 「ワーク」という概念

本論においては、南 (2021) 同様に「ワーク」を鍵概念としている。本論においても、日常生活の活動は「達成される (achieved)」というエスノメソドロジーの考えに従う (Garfinkel 1967; Sacks 1992; Crabtree et al. 2012)。Crabtree たちはワークという考えは「活動を成し遂げるためにひとびとがしなければならないことすべて」を指すとしている。

2) ダルク施設長の有志による『ダルク：回復する依存者たち』(ダルク編 2018) の「編者紹介」において「ダルク」は以下のように紹介されている：

ダルクは 1985 年、東京で始まった薬物依存者自身による回復のムーブメントである。国や専門家が主導し回復支援の諸施設を整備してきた欧米と異なり、既存の制度や専門性に縛られない独自の発展を遂げてきたが、近年は公的資金を受けて運営するダルクも増えており、同時に新たな課題も生まれてきている。創始者は近藤恒夫。各ダルクは独立しており、本部・支部関係になく、現在全国で 80 が所以上の活動がそれぞれに展開されている。精神科医などの専門家からは「治療共同体」と呼ばれることもある。

「ワーク」という考えは、そうすると、まさに普通の意味で、ひとびとが従事している活動を達成するのにしなければならぬすべてのこと、そして、それが賃労働の組織されたシステムの一部であろうとなかろうと、活動を成し遂げるためにひとびとがしなければならないことすべてを指す。したがって、私たちにとっては、「ワーク」という考えは、どこにおいてであれ、ひとびとがそれをする目的がいかなるものであれ、ひとびとがするいかなること、あらゆることを指すものなのである。「ワーク」は、私たちの種類のエスノグラフィックな研究の最上位の焦点なのである。(Crabtree et al. 2012: 24)

ワークのエスメソドロロジー研究においては、活動の達成という側面に焦点が置かれ、とくにその組織化が焦点となる(池谷 2019)。

ワークの研究とは、一言でいえば、ある領域で達成されると理解されているワークがいかに達成されるのかを記述することである。しかしそれは単純に手順を記述することとは異なる。ワークがいかに組織されるのかを記述するのである。ワークの組織化に注目する理由は、特定の方法で組織することで、ワークの従事者は互いの行為を理解し、活動を遂行するからである。(池谷 2019: 13)

一方、薬物依存からの回復を構成する活動やワークがどのようなものであるかはいまだその特定が進められている途上である。その日常生活を詳細に記録することがいろいろな事情から困難だからである。エスノメソドロロジーを「観察社会学」とする立場があるが(Francis & Hester 2004=2014; 岡田 2019, 2021)、たとえば、薬物依存者にはかつて違法薬物を使用した者もいる。個人情報保護の必要性も大きい³⁾。

本論では、回復が達成されるものであり、人びとのワークからなっているという想定の下に議論を進める。とくに、施設移動をワークの達成ととらえる。それまでに入寮していた施設から新しい施設への移動はどのように生じて、受け入れられるのか。そこにはどのような交渉があるのだろうか。

2 調査協力者と方法

本論の研究では、インタビュー記録を主要データとする。2019年11月と2020年1月に2つのダルクを訪問して、施設移動を経験した4人に話を聞いた。地方都市から山奥に入ったところに位置するPダルクのAさんとBさん、そして、地方都市の中心部にあるSダルクのCさんとDさんである。全員男性で、AさんとBさん、Cさんの3人はインタビュー調査の時点で30代後半だった。Dさんは40代後半だった。このうち、Dさんをのぞく3人から「同じこと」の繰り返しという趣旨の表現が聞かれた。

AさんとBさんの2人はYダルクからPダルクへ施設移動となった。以前南はYダルクで2人にイン

3) 南たちによる、SMARPPという認知行動療法のグループワークの研究は、相互行為記録を収集し分析した数少ない試みの例である(南 2019; Minami & Okada 2020)。

タビューをしていたこともあり、施設移動となるまえの状況についての情報もあった。CさんとDさんは、初対面だった。インタビューに応じてもらえるひととしてSダルクの施設長に紹介してもらった。

インタビューは、南と一対一で対面で実施した。短いひとでは40分、長いひとでは70分超となった。同意を得てICレコーダで録音した。それを文字化して基本データとしている。なお、その抜粋を本文中および論文末に掲載するが、使用する記号は最低限にとどめた。使用した記号としては、直前の音の引き延ばしを「ー」（長音記号）で示した。長音記号の数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。語尾の音が一端上がったあとまた下がる（もしくは平坦になる）とき、それは逆疑問符（*?*）で示される。聞き取りが確定できない部分は丸括弧（言葉）で示した。二重丸括弧（ ）は南による注記である（西阪 2008）。インタビューアである南の「ええ」や「はい」などの「相槌」的な発話は読みやすさを考えて省略している。会話分析で採用されるような詳細なレベルで作成したトランスクリプトではないことをおことわりしておく。

2-1 インタビューの語りとワーク

本研究の主たるデータは対面インタビューの記録である。インタビューは活動であり、それ自体の組織を持つ相互行為である。エスノメソドロジーと会話分析の観点からは、インタビューというトークの組織を捉えることがまず重視されるべきとされている（Francis & Hester 2004=2014; 申田ほか 2017）。

本論において、相互行為としてのインタビューの組織という観点は、連鎖組織への着眼において発揮される。回答としてもたらされる語りがどんな問いに応じたものかをていねいに見ていく。南の問いがきっかけとなって調査協力者が語りを回答として提供するというのが基本構造である。南の「相槌」は書き起こしに含めないという本論の分析方針はこのような理解に依拠している。

語られている内容のなかでは、なんらかの活動を構成するものに着目する。1節で述べた達成される活動としての「ワーク」という観点である。活動の参加者やなされたことや言われたこと、そしてその受けとめを特定していくことで分析を組み立てる。

3 施設移動の流れ：Aさんの事例を元に

本節では、1つめの調査疑問を取り上げる。Aさんの事例を元に施設移動のかたちを示すとともに、「同じこと」の繰り返しという表現がどのように使われたかを明らかにする。まず、施設移動決定というワークに関与したひとびとがどのようなひとであったかを論じる。つぎに、施設移動を説得するときに「同じこと」の繰り返し表現が使われた部分を取り上げる。最後に、薬物使用に関してAさんがどのような自己認識を持っているかを確認する。

調査時Aさんは30代後半の男性である。薬物使用のはじまりは危険ドラッグだった。取り締まり強化で危険ドラッグが入手困難となったために、覚醒剤を使用し始めた。覚醒剤使用で逮捕され執行猶予判決を受けたのちにQダルクに通所を始めた。すぐに再使用してYダルクに入寮することになった。Yダルクに10か月いたあとQダルクに戻って10か月入寮していた。円満退寮したものの、すぐに再使用

して再びYダルクに入寮した。その入寮中にまた覚醒剤の再使用で入院し、今回のPダルクへの施設移動、入寮となった。

Aさんの施設移動は、最初に通所した施設であるQダルクと2つめの利用施設であるYダルクの2人の施設長によって提案された。Aさんの反応は、「もうしぶしぶ行くしかないなあみたいな、いえにもちょっと、もう帰れない状況なんで。まあちょっと、あのう1回やり直してみようかなってゆう気持ちもちょっとまあきっていか」というものだった。

3-1 施設移動決定に関与したひとびと

まず、Aさんが施設移動となるにあたり関与したひとびとについて論じる。ダルクの施設移動は、最初の入寮時と同じく本人の意思に基づくものである。薬物の使用をやめたいという本人の意志があってはじめてダルクは受け入れる。だが、本人がみずからすすんでダルクに入寮したり施設移動を求めたりするわけではない。周囲のひとからの勧めや説得があつてのことである。

Aさんの場合、施設移動に関与したとしてインタビューにおいて名前があがったのは、上記2人の施設長のほかに、福祉の生活保護担当者、精神科病院の主治医、そして親であった。それぞれ、退院後の居住地決定にかかわる権限をもつひとびとだ。まず、30代で未婚のAさんにとって実家は、退院してからの行き先候補のひとつとなる。だが、親はAさんの受け入れを拒否した。Aさんによると、「いえにももうちょっと、帰れない状況」であった。それまでの薬物使用を通じて、親には多大な迷惑をかけていたことが推察される。

実家に帰れない場合、ダルクに行かないとすると生活保護で一人暮らしをすることが考えられる。だが、薬物依存者が生活保護の対象となるのはなんらかの施設で「治療」あるいは回復に取り組むことが条件となる。Aさんは一人暮らしの可能性を探るべく生活保護の担当者に相談したが、退院後はダルク入寮が生活保護継続の条件であり「いまの状況じゃ無理ですよ」という回答だった。

そうなると、残された行き先はダルクということになる。その場合、最初に利用したQダルクや2か所目のYダルクが候補となるが、これらの施設長からはPダルクを勧められた。さらにAさんは、入院していた精神科病院の主治医であるE医師からも、施設移動を勧められた。抜粋1のように、「環境変えてやったほうがいい」（14行）と言われたのである。

抜粋1 施設移動決定に関与したひとびと（Aさん）⁴⁾

14 A: E先生(Aさんの主治医)のほうもPのダルクに行って環境変えてやったほうがいいって
15 いうことをいってたんで、毎回同じこと繰り返してるんで、もうちょっと、1回仕
16 切り直したほうがいいみたいな、そんな話をちょっとされてて、でえその、E先生と
17 まあQさん(Qダルク施設長)と話して、で、親もそういう意向だったんですよ。

4) 抜粋1は抜粋2の続きである。そのまえの部分からのまとまりを付抜粋1として論文末に掲載している。行番号は通しとしている。

このように、主治医とダルク施設長は、Pダルクへの施設移動を勧めた。Aさんの親も賛同した（「親もそういう意向だった」抜粋1の17行目）。Aさんは、一人暮らしの可能性を探るという主体性を見せたものの、「しぶしぶ行くしかないな」と施設移動を受け入れた。施設移動が決まるまでに、さまざまなひととのあいだにやりとりと交渉、ワークがあったことをここに見てとることができる。

3-2 施設移動説得の根拠

つぎに、施設移動がAさんの回復にとって効果的であると説得されたときの根拠を取り上げる。「しぶしぶ」施設移動を受け入れたAさんだが、納得する論理が必要だった。それが抜粋1に見られる「毎回同じこと繰り返してる」（15行）という「状況定義」（Thomas 2019）である。

Aさんによると、施設移動の理由は一言で言えば、覚醒剤を再使用して幻覚が出るようになったことである。だが、抜粋1に見られるように、施設移動してのダルク再入寮を説得する根拠として精神科の主治医に言われたのは「毎回同じこと繰り返してる」というものであった。

「同じこと繰り返してる」という表現については、3点を指摘したい。まずこれは、薬物依存の状況を表現するのによく使われるということだ。自助グループであるNAの基本テキストで「ベーシックテキスト」と呼ばれている書物では、「同じ過ちを何度も繰り返し」という表現がなされている。

ひったくりのジャンキーであれ、何件かの医院を回って合法的な処方薬を手に入れていた上品な老婦人であれ、私たち全員に共通していることが一つある。それは、一袋、数錠、あるいは一本単位で自分を破滅に追い込み、結局命を落とすまでやめられなかったということだ。これがアディクションの狂気の部分である。医者にたわいない嘘をついて薬物を手に入れるよりも、一回の注射のために体を売った代償のほうがはるかに大きいように思えるかもしれないが、最終的にはどちらも命をかけてこの病気の代償を支払ったことに変わりはない。狂気とは、同じ過ちを何度も繰り返しておきながら、違う結果を期待することだ。（Narcotics Anonymous 2006 : 37）

Aさんが主治医から言われた「同じこと繰り返してる」は、上の引用にあるようにNAのものである「同じ過ちを何度も繰り返し」を少しだけ変えたものである。

2点目は、「同じこと」の内実に関わる。Aさんは、今回の再使用では幻覚が出た。以前にも覚醒剤を使用して幻聴が聞こえたことはあったが、幻覚が出たのは初めてだった。幻覚のために、Aさんは自分から精神科病院に助けを求めて入院した。南とのインタビューにおいて、Aさんは合計3回の再使用経験を語った。最初のQダルクを退寮後に再使用したこと、つぎにYダルク入寮中に最初の再使用をして入院となったこと、そして、この入院からYダルクに戻ってまた再使用したこと、の3回である。いずれも、再使用して使用がとまらなくなり、最後には入院して解毒治療が必要となったという点では「同じこと」であるが、使用状況の詳細においては異なる点も多い。しかし、主治医は「同じこと繰り返してる」と言っており、Aさんもそれを受け入れている。再使用して入院という大枠を「同じこと」とくくっているということだ。

3つめに、「同じこと繰り返してる」をAさんは他人から言われたこととして述べている点特徴的である。のちに取り上げるBさんとCさんが、自分自身の認識として述べているのとは対照的である。Aさんの回復の取り組みの状況を反映するものと捉えることができる。

さらに、抜粋1に見られる表現で、施設移動説得の根拠として重要なものがもうひとつある。「仕切り直し」(15-16行)というものである。これは、ダルクでの入寮生活をやり直すということだが、その場所がPダルクであるということに大きく関係している。Pダルクが位置するのが、ある地方都市から山奥に入ったところであるからだ。QダルクとYダルクは都市部にあり、買い物に行く店などが徒歩圏にある。夜のNAミーティングには公共交通機関を使って通う。対照的に、Pダルクのまわりには店舗も公共交通機関もない。夜のNAミーティングには、施設から送迎の自動車にみんなで乗り合わせて出かけていく。その帰途にコンビニエンスストアなどに立ち寄るのが唯一の買い物の機会である。Yダルク入寮中に、抜け出して覚醒剤を買いに行ってしまったAさんが「仕切り直し」するのにはうってつけの立地条件である。Aさんもこの点を認めており、そのことを反映する発言がインタビューの別の箇所で見られた。Pダルクは「物理的に使えない環境」だと述べたのがそれである。薬物の入手は困難だし、よしんば入手できても、みんなに隠れて使う場所もないということである。

このように、施設移動の提案は、Aさんの状況を「同じこと繰り返してる」と定義し、「仕切り直し」のための機会として提示されている。

3-3 薬物使用についての自己認識

最後に、薬物使用をAさんがどのように捉えているかを論じる。一言でまとめると「もうどうやってもうまく使えないんだなっていうのは自分の中でわかってきた」(抜粋2の11-12行)というものである。

Aさんは、Pダルクでの入寮生活中に覚醒剤の欲求を強く感じることもある。その一方で「使うのも限界がきちゃってる」とも述べている。「限界」が来るまえには「うまく使えて」いたということが含意されている。抜粋2は、その点をたずねたときのやりとりである(なお、その直前を含むものを抜粋1として論文末に掲載している)。

抜粋2 薬物使用についての捉え方 (Aさん)

- 7 南： そのう、もうあんまり、うまく使えなくなったよ
- 8 A： もうちょっと、うまく使えないとかあのう。もう何回も、今度こそはうまく使え
- 9 るなんて思って、何回もトライしたんですよね。ことごとく、まあ何回ぐらいかなあ、
- 10 けっきょく最終的にはおかしくなっちゃって、で、また入院して、そっからダルク。
- 11 その無限ループにはまっちゃってて、もうどうやってもうまく使えないんだなってい
- 12 うのは自分のなかでわかってきたっていうか。わかってるかどうかちょっとこわいん
- 13 ですけど。(間)

Aさんが「今度こそうまく使えるなと思って、何回もトライした」（8-9行）と言っているが、「うまく使える」という表現は、薬物依存者のあいだでよく使われている。これが表現しているような状態が実際にあるのかどうか、あるいは少なくともAさんにとって可能なのかどうかは定かではない。たしかなのは、そのような状態が可能であり、「何回もトライしたんですね」（9行）と言っているように、Aさんはそれを追い求めていたということである。

だが、「けっきょく最終的にはおかしくなっちゃって」（10行）とAさんは言う。「入院して、そこからダルク」（10行）入寮となる。その結果、「もうどうやってもうまく使えないんだなっていうのは自分の中でわかってきた」（11-12行）と述べている。とは言うものの、「わかっているかどうかちょっとこわいんですけど」（12-13行）と最後に付け足しているところには注意が必要である。これからも再使用してしまう可能性がある、自分でも自信がないということをほのめかしている。

薬物を「うまく使えない」という自己認識が示されていることを確認したが、「無限ループにはまっちゃって」（11行）という表現がここで使われていることは重要である。抜粋2はインタビュー開始から40分以上経過した部分である。最近の薬物への欲求を話題の中心とした部分でありそこで自発的に使われた表現である。内容としては、その直後に発せられた「同じこと繰り返してる」（抜粋1の15行）と同義である。再使用して入院、そしてダルク入寮が「ループ」として繰り返されているというまとめ方がなされている。回避すべき対象がはっきりと自覚されていることの反映である。

以上、Aさんの施設移動に関与したひとびとと使われた説得の根拠をみてきた。「同じこと繰り返してる」を核とする説得活動の一端を垣間見ることができた。最後に、「うまく使えない」という自己認識を論じたが、これが施設移動を受け入れる基盤となっていると想定することができる。

4 施設移動にともなう変化

つぎに、施設移動にともなう生活の変化とその帰結がどのように語られるかをBさんの語りを元に論じる。Bさんも30代後半の男性である。BさんにとってPダルクが2か所目のダルクとなる。最初に入寮していた大都市圏のYダルクから移動してきて1年になる。元の依存物質は覚醒剤だったが、今回はガスを吸って入院となった。退院後、Pダルクへの施設移動が提案されてBさんはそれを受け入れた。

4-1 移動後の施設での生活

Bさんは、Pダルクへの施設移動を肯定的に語っている。インタビューにおいて、施設移動の経緯をたずねたやりとりのあとの、新しい施設に「来てみてどうですか」という南の問い（抜粋3の1行）にたいして、「クスリの欲求」が「今」「とまって」と回答した（3行）。移動後の「最初のころより」、「欲求もはいらなくなって」いる（2行）と言うのである。

抜粋3 移動後の施設での生活（Bさん）

1 南：　　そうですね。で、来てみてどうですか。

2 B：　　来てみて、まあですね。まだん、最初のころよりかはもう、欲求もはいらなくなって。

- 3 まあ今とまっていますよね、はい。クスリの欲求。
 4 南： ふーん。ここはプログラムが多くて忙しいみたいですけど。
 5 B： んー、まそうですね。だから1日たつのがやっぱ早くて、なんだろう。むこう、Y
 6 《ダルク》にいるころよりかは、こう早くこう、なんだろうなこう。頭もはたらくよう
 7 になったり。すこしほけてたのも、やっぱ動きながらなんで。寝てるよりかは。寝て
 8 ミーティングだけっていうよりかは、一日中役割で動いたり。ま太鼓やったり音楽
 9 やったりしてるんで、わりかし早いかもしれないですね、こう。

そして、この好ましい変化がPダルクでの生活によってもたらされたと考えていることをうかがわせる発言が見られる。続く部分でBさんは、Pダルクでの生活と以前のYダルクでの生活を対比する。南からの「プログラムが多くて忙しいみたい」という問い（4行）にたいする回答である。Pダルクでは「1日たつのがやっぱ早くて」（5行）、「頭もはたらくようになった」（6-7行）。それは、Yダルクでの生活が「寝てミーティングだけ」（7-8行）だったのとは対照的に、Pダルクでは「一日中役割で動いたり」「太鼓やったり」「音楽やったり」（8-9行）しているからだ。そのために「1日たつのが」（5行）「わりかし早いかもしれない」（9行）のである。

「役割」（8行）というのは、寮生活をしていくうえで分担しておこなう作業を指している。そのほかの活動として「太鼓」と、バンド楽器を演奏する「音楽」活動もある。これらに言及しながらも、「忙しい」という南の否定的な含意をもつ問い（4行）にたいして、「1日たつのが」早いという肯定的ともとれる回答をしていることに注目すべきである。

さらに重要なのは、「頭もはたらくようになった」（6-7行）という部分である。これは、「すこしほけてた」（7行）との対比を構成している。「寝てるよりかは、寝てミーティングだけっていうよりかは」（7-8行）とあるように、からだを動かす活動が少なくして昼寝などをする時間が多かったYダルクのときは「ほけてた」のだが、Pダルクに来て生じた好ましい変化である。

抜粋3では、南の問いは、施設移動しての変化をたずねている。それにたいして、Bさんが薬物への欲求と意識の明晰度におけるBさん自身の変化について語ることで回答している点が重要である。いずれも回復として望ましいものであり、Bさんが施設移動の帰結として望ましい変化が生じていると捉えていることを示すものである。

4-2 取り組み姿勢の変化

施設移動の効果として期待されることのひとつに回復プログラムへの取り組みの変化がある。Bさんは、Pダルク入寮が「2回目」であることを意識している。「自分の意思で」入寮を決めており、「取り組み姿勢」が「変わった」と言う。つぎにこの点を見ていく。

抜粋3のあと南はPダルクの生活が「楽しいですか」とたずねる（付抜粋2の10行）。この問いへの回答がすこしあったあと、それに続く部分が抜粋4である（付抜粋2には抜粋3と抜粋4を含む全体を示している）。注目したいのはそのつぎの部分である。施設移動となったことについての意識をはっき

りと表明している。「までも2回目でね、やっぱりやり直して来てるんで」(抜粋4の16-17行)と言っている。

抜粋4 2回目の入寮であることの意識 (Bさん)

- 15 B: でこれ、ここで楽しめない、やっぱりまずいなっていうふうに思うし。これ以上の生活はたぶんない、ないから。仲間も多いし。まあなんかこう。までも2回目でね、やっぱりやり直して来てるんで、あのう。今回はけっこうこう、うーんちゃんと考えてやってるっていうか。なんかなんとなくダラダラといてえ、退寮すればいいやっていうのから、とはちょっと、内容が変わったかもしれないですね。なんか、プログラムを取り組み姿勢とか、
- 21 南: あ——
- 22 B: なんかそういうのはやっぱり自分の意思でこう、ね。
23 《どこかでなにかの呼び出し音が鳴る》
- 24 B: そのまえまでは、連れてこられたとか。
- 25 南: あ——
- 26 B: ちょっと退寮したら使いたいとかそういうのもあったすけど、やっぱり2回も入寮になると、ん。ん——もうちょっとダルクはもういいかなと思って。やっぱり思う。クスリがね、抜けてくるとね、やっぱりそう思うっていうか。やってくるときは助けてほしいと思うけど——
- 30 南: ふーんふーん。そうですね。

Bさんが「内容が変わった」(19行)と述べていることはとくに重要である。施設移動をして入寮生活が「2回目」となったことで変化があると主張しているからだ。そして、なにが変化したかという点、「ちゃんと考えてやってる」(17-18行)ということであり、「プログラムを《「の」の言い間違いと思われる》取り組み姿勢」(19-20行)である。そして変化する以前のすがたを「なんとなくダラダラといてえ、退寮すればいいやっていうの」(18行)と述べて、対比している。

このような変化をもたらしたものとして、入寮の経緯が語られていることも目を引く。「そのまえまでは、連れてこられたとか」(24行)と述べているように、最初のダルク入寮は、Bさんがしぶしぶ受け入れたものだった。対照的に今回のPダルク入寮は「自分の意思で」(22行)のものである。「取り組み姿勢」が前回とは変化している一因とされている。

4-3 やめられないという気づき

Bさんのプログラムへの取り組み姿勢が変化したのは、「自分の意思で」Pダルクへの施設移動を決めたことが関係している。それでは、この意思決定につながったのはどんな経験だろうか。それは、薬物はどんなものであれ「いっしょ」であり一度使い始めるとやめられなくなるという気づきであった。

Bさんは覚醒剤使用での刑務所経験がある。覚醒剤が「本命」の依存物質である。覚醒剤を使用すると警察に「つかまる」。それがいやなので、Bさんは卓上コンロ用ガスボンベのガスを吸うようになった。あるときまでは「平気」でうまく「使えてた」。だが「やめれなくなって」「やっぱりいっしょなんだ」とわかったのである（抜粋5）。

以下の抜粋5ではそのときの経緯が語られている。覚醒剤を使用したときのこととガスを使用したときのことが混在しており、判然としないところもある。だが、ガスは覚醒剤に比べると「ライトなもの」（6行）であり、NAで禁じられている依存物質を再使用することを指す「スリップしたっていう感覚がなかった」（7行）。「これでなんとかこれで、両方おさまるならこれはこれの方がいいんじゃないかっていうふうに思ってい」（7-8行）たと言うが、「両方」というのは覚醒剤への欲求とガスへの欲求ということかと思われる。つまり、「本命」の依存物質である覚醒剤を使用しなければ、「平気なんじゃないか」（10行）と思っていた。

抜粋5 ガスと覚醒剤（Bさん）

- 1 南： 1年ぐらいで出て使わないっていう。これでもう大丈夫。使わないっていうよりも早く出たっていうか。
- 2
- 3 B： まあそのときはなんだろうな。やっぱり、本命が覚醒剤で、
- 4 南： はいはい。
- 5 B： 覚醒剤を使いたいけど使えないっていう。でも、それを（おいていて）で、ガスですべったときには、まそのときはですけど、あけっこうライトなものだから、なんだろうこう、スリップしたっていう感覚がなかったんですね。これでなんとかこれで、
- 6
- 7
- 8 両方おさまるならこれはこれの方がいいんじゃないかっていうふうに思っていて。
- 9 南： はいはい。
- 10 B： 自分のなかでは本命を使わなければべつになに、平気なんじゃないかなってゆう
- 11 南： ふーん、ふーん。
- 12 B： ほんとにひどくなって、ほんとうにくるしくて、つかま、つかまってねこう、そういうのが、そういうのには戻りたくないとおもう、思うけど。そのときはまだその使えたな、使えてたんだと思うんですけど。それでやめれなくなって、入院する手前ぐらいのときには、やっぱりいっしょなんだなっていうのがわかって。
- 13
- 14
- 15
- 16 南： ああなるほど。
- 17 B： ん。これやめれないわと思って。やっぱり、ヤク中だから、どんどん量も増えてって、
- 18
- 19
- 20
- 21 南： ああなるほど。

Bさんがある一時期は、うまく「使えてた」(14行)と述べているところは注目点である。ガス使用の量と頻度において、適切に「使えてた」と感じられる時期があったとBさんは主張している。そのような状態がどんなものであるのか、どれくらい続くものなのかはわからないが、Bさん自身がそのように感じて話しているということである。

だがけっきょくは「ないとやっぱ苦しい状態になってしま」った(18行)。使用量が「どんどん」「増えて」(17行)いった結果である。「やっぱりいっしょなんだなっていうのがわかって」(15行)ということだが、依存物質が覚醒剤であろうとガスであろうと、「やめれなくなって」(14行)、入院して解毒治療が必要となるのは「いっしょ」だと気づいたということである。

Bさんは、「それで初めてなんかこう、あ、もう1回ちゃんとやり直そうかなって思」った(18-19行)。「こりたのはそのとき」(19-20行)とはっきり言っている。前節のAさんが、「もうどうやってもうまく使えないんだなっていうのは自分の中でわかってきたっていうか、わかってるかどうかちょっとこわいんですけど」と抜粋2の最後のところ(11-13行)で留保を付け足しているのとは対照的である。

薬物を再使用し、とまらなくなつて入院したという経験は同じである。つまりうまく「使えない」ことに気づいたこともBさんとAさんに共通している。違うのは、Bさんが「こりた」と言っているのにたいしてAさんは「わかってきた」と表現しているところである。Aさんの場合は、「わかってるかどうかちょっとこわいんですけど」と留保をつけている点も違う。

くわえて、依存物質が同じか違うかという差異もある。Aさんが同じ覚醒剤の再使用だが、Bさんは「本命」の覚醒剤とは違う依存物質であるガスを使用してのスリップである。自助グループNAの教えでは、使用してはいけない依存物質にはアルコールも含まれている。アルコール使用が本命の薬物使用につながるとされている。Bさんが、自分のことを「ヤク中」と呼んだ(抜粋5の17行)のは、まさにNAの教えにしたがって自身を理解していることの反映と考えられる。依存物質を使わないでいることをクリーンと呼ぶが、クリーンを続けて回復していくのに使用を回避すべき薬物についてもNAの教えを尊重していく考えである。

4-4 ステップ4への取り組み

Bさんは、施設移動を経験して回復プログラムが進んだ事例と位置づけることができる。本節でこれまで論じてきたように、入寮が2回目となっていることを重く受けとめて(4-1項)、取り組み姿勢を変化させ(4-2項)、依存薬物をうまく使うことができない「ヤク中」とであると自認している(4-3項)。「ヤク中」という自己規定は自助グループNAの教えに従ったものである。Bさんは、Pダルク入寮中にステップ4に取り組もうとしている。ここにもBさんがNAの回復プログラムを受け入れていることが見られる。本項ではこの点を取り上げる。

ダルクが依拠する回復のプログラムは自助グループのNAのものであり、その中核に12ステップがある。12ステップはアルコール依存者の自助グループであるアルコホーリクスアノニマスで最初に作られた(Alcoholics Anonymous 1939)。

多くのダルクにおいては、入寮中はステップの1から3を繰り返し学ぶことになっている⁵⁾。対して、ステップ4は退寮後にスポンサーを見つけて、そのスポンサーと一っしょに取り組みべきものである⁶⁾。だが、BさんにたいしてPダルク施設長のPさんは、「ステップ4を、しなさい」と提案したという(抜粋6の2行)。

抜粋6 ステップ4を「やってみようかな」(Bさん)

- 1 南： その12ステップはやっぱりまだいちにさんですか。
- 2 B： 12ステップ。いや今は、ステップ4を、しなさいというふうに、Pさん(Pダルク施設長)に提案があって、でいちおう12月で1年に、1年になるんですよ。だからここは一応は13か月最短で、13か月でっていうんで。まあYさん(Yダルク施設長)にはクリーンだけとりあえず作ってこいって言われて、Pさんが、いって言えば、いつでも帰ってきてもいいからなってYさんにいってもらって。
- 7 南： なるほど。
- 8 B： そう一応あずかりっていうかんじじゃないですけど一応そういうふうに言われて来て。
- 9
- 10 南： なるほど。
- 11 B： で、一応みんなに助けてもらったから、1回は戻ろうかなと思ってそれでこのまえね、提案して相談したんですよPさんに。そしたら、クリーンはまできて、まいるけど、こここの1年は、ここにいればやっぱりクリーンはつくれるわけで。出れないし、買にも行けないし、まあ、まちなかのダルクではないから。守られてるんで。ん、ま、そういうのは心配ないけど、ま、それだけで帰ると、なんでじゃあY(ダルク)ですべったんだっていう、そこを、棚卸して、そこを理解して、あのう、ステップ4を、まやってから、帰ってもいい、帰ったほうがいいんじゃないかっていうふうな提案で。
- 18 南： なるほど。
- 19 B： まやってみようかなって。
- 20 南： あー
- 21 B： いままでステップやってみろっていわれたことがなかったんで、とくにまあ自主的にやってみようっていうのもべつにそういうことは、ダルクでは強制的にっていうのはない、ないから。ま、やってるひとはやってるとは思うんだけど。ん。
- 24 南： そのじゃあ少し考え始めてらっしゃる、

5) ナルコティクスアノニマスの12ステップは以下のウェブサイトに掲載されているので参照してもらいたい。 <https://najapan.org/about-na/what>

6) 「スポンサーとは、自助グループ(NA)の中での相談相手のこと。NAにつながりながら薬物を使わない生き方を続けていくために、NAメンバーは自分より経験のあるメンバー(「先ゆく仲間」)に相談に乗ってもらったり、助言や提案をもらったりしている。」(ダルク研究会編 2013: 373)

25 B: そうすね. だからコクヨノートと, ペン持って. まその時間に空いてる時間にまあやっ
26 てね. こう, まやろうかなっていう.

抜粋6の冒頭, 南は12ステップの取り組みについてたずねている(1行). それにたいして, Bさんはステップ4をやるようにP施設長から言われたと述べる. だが, その経緯が込み入っていてその説明がある. そこをまずまとめると, Pダルクの標準プログラムから話が始まる. Pダルクでは13か月の入寮を基本としている. Bさんはその標準入寮期間満了に近づいている. 13か月すると退寮できるのだが, BさんはYダルクに施設移動して戻ること考えている. それは, そもそもYダルクからPダルクへと施設移動となるときに, Yさんから「クリーンだけとりあえず作ってこいって言われて」(5行)来たからである. 「クリーン」という依存物質を使わない期間を1年続けることが回復の第一段階とされている.

その目標を達成したところで, BさんはYダルクに「1回は戻ろうかなと思って」いる. Yダルクの「みんなに助けてもらったから」(11行)である. この考えをPさんに話したところ, Pさんからはステップ4を「やってから」「帰ったほうがいいんじゃないか」(17行)と言われた.

というのは, Pダルクにおけるクリーン1年は特別なものという見方がある. 山奥に位置しており, 「出れないし, 買いにも行けないし, まあ, まちなかのダルクではないから, 守られてる」(13-14行)からである. つまり, 自分で自由に外出はできないので, 依存物質を買いに行けない. その意味で「まちなかのダルク」とは違って「守られて」いる. 「まちなか」の生活に戻って再使用につながる可能性がなくなるとかんたんに想定することはできない.

ステップ4は「私たちは, 徹底して, 恐れることなく, 自分自身のモラルの棚卸し表を作った」(Narcotics Anonymous 2006: 43)というものである. ステップ4は, 一言でいうと自分の人生をふりかえって自己と薬物使用についての理解を深めることである⁷⁾. だが, PさんがBさんに提案したのは, Yダルク入寮中にBさんが再使用をすることになった経緯に関わる棚卸しのみである. 「なんでじゃあYですべったんだっていう, そこを, 棚卸しして, そこを理解」(15-16行)するためにステップ4をやってから「帰ったほうがいいんじゃないか」(17行)というわけである. BさんはPさんのこの提案を受け入れた. ステップ4に取り組む準備として「コクヨノートと, ペン」を用意した(25行).

以上4節では, 施設移動後Pダルクでの入寮生活が1年に近づきつつあるBさんが施設移動にもなう変化と帰結をどのように語るかを見た. 2回目の入寮で「やり直し」という意識を強く持っており, 前向きに取り組んでいた. 依存物質を変えてみても「いっしょ」という気づきも得ていた. ステップ4をおこなうことで薬物の再使用について棚卸しして理解して帰るといふ決意を固めていた.

Bさんの場合は, 「同じこと」という表現を使うことはなかった. 依存物質が覚醒剤でもガスでも「いっしょ」と表現した. 「同じこと繰り返してる」というAさんの表現と2点で違うと思われるかもし

7) 具体的にステップ4をどのように進めるかはひとそれぞれようである. 以下の文献にその一端を見ることが出来る (McQ 2005=2008; Narcotics Anonymous 2012).

れない。だがそうではないことを主張しておきたい。

1つめは表現が違うことだ。「いっしょ」と「同じ」と違うことばを使っている。だが、これは表現上の問題にすぎない。大きな違いと見えるのは2点目の、「こと」がついているかどうかである。つまり、依存物質の異同と、再使用することあるいは再使用してやめられなくなるという状況との対比である。

覚醒剤の代わりにガスを使うということは薬物の再使用である。抜粋5の14-15行で「入院する手前ぐらいのとき」とあるが、病院に入院しての解毒治療が必要なほどにひどくなったということであり、それが「いっしょ」なのである。「やっぱりいっしょなんだな」という抜粋5の15行は、当時の心境の自己引用として提示されている⁸⁾。入院することになったときの心情であり、気づきである。対照的に、「同じこと繰り返してる」は、距離をおいた客観的な描写である。つまり、「同じこと繰り返してる」の気づいたときの本人の心情を「やっぱりいっしょなんだな」は表現している。

このようにBさんはAさんと同じように「同じこと繰り返してる」という記述が自身にあてはまるという認識を示している。そしてさらに重要なのが、Bさんは自分自身の気づきとしてこのことを語っていることだ。Aさんが精神科医に言われたこととして語っていたこととの違いは大きい。回復段階における違いを示すものと位置づけることができる。

5 繰り返し脱却とダルクスタッフ

薬物依存からの回復のひとつのかたちとしてダルクスタッフがある（南 2015; 2018; 南・中村・相良編 2018）。30代後半のCさんは約10年にわたる4回のダルク入寮生活を通じて、ダルクスタッフを目指すようになった。Cさんの場合は、「同じこと繰り返してる」からの脱却の契機として施設移動が語られた。本節では、Cさんの事例を詳しく検討する。Bさんは「いっしょなんだ」という気づきを述べたが、Cさんは「繰り返し」への怖れと脱却の取り組みを施設移動の帰結としてあげる。Cさんは、2つめの調査疑問にこたえる2つの事例の2つめである。

Cさんは30代後半の男性である。10代から薬物を使いはじめた。20歳のときに覚醒剤で逮捕されて執行猶予付き判決を受けた。執行猶予が切れるころに2度目の逮捕となり約2年の実刑となった。出所後1年半で今度は大麻で3度目の逮捕をされて懲役となる。20代の終わりに出所してPダルクに入寮となった。

南がCさんにインタビューしたのは2020年に地方都市にあるSダルクを調査訪問したときのことだった。CさんがQダルクに最初につながってから10年ほどが経過していた。Cさんは覚醒剤を使用して、精神科病院への入院とダルク入寮とを繰り返してきた。SダルクはCさんにとって3か所目のダルクで4回目の入寮である。インタビューの時点でCさんは、ダルクスタッフになることを目指していた。そうしないとまた覚醒剤を使ってしまおうと考えてのことである。

Cさんは、ダルクにつながって回復に取り組むはじめてからの期間がAさんやBさんと比べると長

8) 引用発話を南はかつて「再演 (replay)」として分析した (南 2008)。Goffman の『フレームアナリシス』を参照してのことである (Goffman 1974)。

い。AさんやBさんが回復の初期段階とするならば、中期段階と位置づけることができる。このことは、「同じこと繰り返してる」状況が過去のこととして語られるという点にも反映されている。対照的に、AさんとBさんの場合はつい最近の出来事として語られていた。

5-1 繰り返し脱却のためのダルク入寮

Cさんの回復の語りにおいては、「同じこと繰り返してる」からの脱却につながるものとして施設移動が語られるのが2か所で見られた。最初にダルクに入寮を決めたときと、最初のQダルクを円満退寮後再使用をして、2か所目のRダルクに入寮となったときである。本項では、そのうちの前者を取り扱う。なお、初めてのダルク入寮は厳密に言うとは一つのダルクから別のダルクへの「施設移動」とは言えない。「同じこと繰り返してる」が使用されているためにここでの分析に含めている。

Cさんは20代を「懲役でつぶして」いる。20代のあいだに3回逮捕されて2回刑務所に入った。20代の終わりに出所して初めてのダルク入寮となった。Cさんは、刑務所の外の生活と中の生活の「繰り返し」を問題としている。Aさんの問題が薬物使用と精神科病院入院、ダルク入寮の「無限ループ」(抜粋2の11行)だったのとはすこし違う。抜粋7は、Cさんがダルク入寮を決めた心境を語る部分である。

抜粋7 「繰り返しになっていく」怖れ (Cさん)

- 1 南： そのときはじゃあ、もうやっぱり自分でもどうにかならなくなったよ
- 2 C： そうですねもう、懲役行ったり来たりっていうひとがやっぱり何回、あのうほかにも
- 3 刑務所の中にいるんですよ。覚醒剤でこう、3回目4回目だっていうひとがいっぱ
- 4 いいて、自分もそうになっていくのかなあっていう気は、このままだったらまあぶんそ
- 5 うなっていくんだろうなっていう。
- 6 南： あ——
- 7 C： 1年半しか外にいれなかったしい
- 8 南： はいはいはい。
- 9 C： でつぎ、1年半外にいてえ、ま2年ぐらい刑務所にいて、でまたつぎ出てもー、また
- 10 使って、そういう繰り返しになっていくんじゃないかなっていう気はまあしててえ。
- 11 南： はいはいはい。
- 12 C： してたんですよ。してたんでまあ、まあ病気ってことも知らなかったしい。
- 13 南： あーそうですか。
- 14 C： はい。

Cさんは、2回目の懲役となるときの拘置所と「刑務所」(抜粋7の3行)で多くの薬物依存者に出会った。「懲役行ったり来たり」で、「覚醒剤で」「3回目4回目」の刑務所だというひとたちである(2-3行)。2回目の懲役となるCさんは、「自分もそうになっていくのかなあっていう気」(4行)になった。「こ

のままだったらまあぶんそうになっていくんだろうな」(4-5行)と感じられた。前回出所から「1年半しか外にいれなかった」(7行)ことがなによりその可能性を強く示している。

Cさんは、「そういう繰り返しになっていくんじゃないかな」(10行)と述べている。「同じこと」とはここでは言っていない。だが、「同じこと」が表現する2つの対応関係が抜粋7では述べられている。1つは、「3回目4回目」のひとと2回目となるCさん自身の対応、重ね合わせである。もうひとつは、出所して「1年半外にいて」(9行)、「2年ぐらい刑務所にいて。でまたつぎ出てもー、また使って」(9-10行)という、使用して逮捕されて懲役となって出所してまた使用してという「そういう繰り返し」である。「同じこと」という表現は使わなくても「繰り返し」の対象は同じである。

この部分の最後の「病气ってことも知らなかったしい」(12行)という発話に注目したい。実は、抜粋7はダルクにつながった経緯をたずねた南の問いへの回答の続きである。ダルクについて知ったのは、1回目の懲役から仮釈放となり、保護観察所で「パンフレットみたいなのを持ってきてもらった」ときである。「こういうところがあるから行ってみたらどうですかって言われたんだけどあのう行くつもりはなかったし自分でどうにかなると思ってたから断ったんですけど」というのがそのときのCさんの考えだった。

つまり、1回目に出所したときCさんは「自分でどうにかなると思ってた」。だが抜粋7で語られているように「1年半」で再び逮捕された。それでダルク入寮を決めたということである。薬物依存が「病气」と知らなかったことは、1回目の出所後にダルクにつながらなかった理由として提示されるかたちとなっている。2回目の懲役となるときに「自分でどうにかなると思ってた」のが誤りだったと気づき、出所後にQダルクに入寮したのである。

5-2 施設移動と繰り返しからの脱却

Cさんの「同じこと繰り返してる」からの脱却発話として取り上げる2つめは、施設移動後の変化にかかわるものである。Cさんは、施設移動を契機として「嘘はつかないようにしよう」と決めた。

Cさんは最初のQダルクを円満退寮後、覚醒剤を再使用して入院する。退院後に今度はRダルクに入寮することになった。それまでは覚醒剤を断続的に再使用して入退院を繰り返していたが、Rダルク入寮後にとまった。回復の最初の目標であるクリーン期間1年の「バースデイ」をCさんが迎えたのは、Rダルク入寮中だった⁹⁾。最初にQダルクに入寮してから「4年かかって」のことだった。

クリーン1年を迎えるのに4年かかったとCさんが述べたところで、南がその理由をたずねているのが抜粋8である。ここでは、「同じことの繰り返し」(2行)という表現が使われていることがまず重要である。

9) 「ダルクや自助グループ(NA)につながり、薬物を使わなくなった日を、自分にとっての「もうひとつの誕生日」という意味で「バースデイ」と呼ぶ。その日を起点に、1人ひとりのバースデイを祝う「バースデイ・ミーティング」が1年ごとに開催される。スリッパ(リラプス)をしてしまった場合は、それを仲間の前で認めた日が新たなバースデイとなり、再び「回復」に向けた生活が始まる。」(ダルク研究会編 2013: 374)

抜粋8 「同じことの繰り返しになると思ったから」(Cさん)

- 1 南: ふーん. それはなにが違ったんでしょう.
2 C: んー——, ま, まえとは違うことをしないと—同じことの繰り返しになると思ったか
3 らあ.
4 南: ああなるほど.
5 C: まえどうだったかっていうと, その嘘ばっかついて—,
6 南: はいはい.
7 C: やりたいことやって—. でけっか, まあダメだったんで—. それがまあいけないなど
8 は思ってたから, あのう, 施設で決められたルールとかは, こう守ったりしないとい
9 けないなどは思ったからそこを徹底的に自分の中でまあやろうっていうのを決めたく
10 ていうか.

施設移動後Rダルクに入寮したときに「まえとは違うことをしないと」いけないとCさんは感じている(抜粋8の2行). そうでなければ, 「同じことの繰り返しになると思った」のである(2行). 「同じこと」が具体的になにを指すのかはこの部分では特定されていない. だが, 抜粋7で「繰り返し」(10行)という表現が使われており, 刑務所から出所後再使用して, また刑務所に入るという「懲役行ったり来たり」(抜粋7の2行)状態を指している. 抜粋8の「同じこと」がこれを指しているのは間違いないだろう.

そして, 抜粋8では, 回復のためにしてはならないことが2つ言われている. 「嘘ばっかついて」(5行)と「やりたいことやって」(7行)である. 「やりたいこと」はまさに薬物使用のことであると思われる. 「嘘」はそのために必要となるものだ.

逆に守るべきこととして挙げられているのは「施設で決められたルール」を守ること(8行)である. なかでもCさんが一番重視しているのは正直になることである. 抜粋8の直前で, Rダルクに入寮した「最初のころその土台作りじゃないけどのときに自分で不正直は, 不正直はっていうか嘘はつかないようしようっていうのを決めてやったというのは良かったのかなって」とふりかえっている. 抜粋9はこの部分のさらにすこし前の部分である.

抜粋9 「嘘ばっかついて」いた(Cさん)

- 1 南: ふーん. それはなにが違ったんでしょう.
2 C: んー——ま, それまではこう, ま嘘ばっかついて生活してたんですけどQ(ダルクの
3 とき)とかは, それをしないようにしようっていうふうに一, その入寮になったとき
4 に決めたんですよ. 自分のなかで.
5 南: あ——

「同じことの繰り返し」から脱却するために, Cさんは「まえとは違うこと」をした. Qダルクに入寮

していたころにあたる「まえ」は「嘘ばっかついて生活して」（抜粋9の2行）いたが、Rダルクに入寮となって「嘘はつかないようにしよう」と決めた。Rダルク入寮という施設移動を契機としているとCさんははっきりと述べている（「その入寮になったときに決めたんですよ」3-4行）。

薬物依存からの回復は、大きく分けて2つからなるとされている。薬物の使用をやめることと新しい生き方をすることである。「新しい生き方」は、「スピリチュアルな成長」と呼ばれることもある。その内実を特定するのはむずかしいが、それまでの生き方で薬物を使っていたのであれば、一時的に薬物使用がとまったとしても、生き方を変えないとまた使用してしまうという想定がなされている（Narcotics Anonymous 2006; 南 2014）。

そして、新しい生き方のうちの具体的なものが、嘘をつくのをやめて正直になることである（Narcotics Anonymous 2006: 40）。Cさんは、施設移動を契機として新しい生き方を始めた。そしてその帰結としてクリーン期間が1年となったと述べている。さらにそれが、「同じことの繰り返し」から脱却するためだったとはっきりと結びつけている。

5-3 自分のための仲間サポート

嘘はつかないようにするという新しい生き方を選んだCさんだが、それで回復が順調に進んできたというわけではない。ダルクを円満退寮して仕事を始めると「ミーティングも行かなくなるし仲間から離れ」てしまうというのである。

薬物依存からの回復者は自助グループであるNAミーティングに一生出席しつづける必要がある。薬物依存は「完治」することはない。「死ぬまで」回復をし続けるのである。ダルク退寮後の生活では、夜のNAミーティングに出席することが重要となる。だが、Cさんはそれがうまくできなかった。「働くと、仲間から離れちゃう」というのである（抜粋10の3行）。

抜粋10 「働くと、仲間から離れちゃう」（Cさん）

- 1 南： それは希望としてはあのダルクを出て仕事をしたいという気持ちもあるよ
- 2 C： や2回ぐらいやってるんですよね。ダメ、やってダメで戻ってきて。働けると思って
- 3 たんですけどやっぱりその働くと、仲間から離れちゃうんですよね。そこがなおらな
- 4 いていうか。どうにかなんか病気の部分かもしれないけど。どうにもなんないんで
- 5 すよ。たとえばいまプログラムできて仕事できて順調に施設に行くんですよ。絶対施設
- 6 から離れると自由じゃないですか。ミーティングも行かなくなるし仲間から離れる
- 7 し。で戻れないんですよね。あのちょっと離れた。妄想がはいるんですよ。あいつ使っ
- 8 てるんじゃないかとか、何やってんだ来ないかとか、何やってんだあいつはとか、
- 9 思ってるんじゃないかっていう妄想がはいて行けなくなっちゃうんですよ。

Cさんはダルク入寮中のいまは「プログラムできて仕事できて」いる（5行）。しかし、「施設から離れると」「ミーティングも行かなくなるし仲間から離れる」ことになる（5-6行）。「妄想」が入ってくる。

「あいつ使ってるんじゃないか」と噂されているという「妄想がはいつて行けなくなっちゃう」(7-9行)のである。「行けなくな」るのは、「ミーティング」であり「仲間」のところである。回復を継続するために不可欠とされている場所である。

そういう経験もあって、Cさんはダルクスタッフになることを考えている。抜粋11は抜粋10の9行目のあとすこしした続きである。

抜粋11 スタッフは自分のためになる (Cさん)

- 1 C: だから、自分の病気の部分がさせてんのかなっていう。
2 南: ふーん。
3 C: だからもう、1回やってるんで。こわ、あ2回か。やってるんで怖いんですよ。
4 《間》これだけまあはち、ことして9年になるんですけど――まあ、あのつながってから。
5 南: はいはいはい。
6 C: まあスタッフとかをまやれ、やれてないっていうか。そのあんまりサポートする立場
7 にこうな、なれてないから。だから自分のためにはなるのかなっていう気はするんで
8 すよね。やれ、もし、仲間のためになんかをするとか。まあ苦手だったしい。
9 南: ほ――。

抜粋10の最後のところ(7-9行)で、妄想が入ってミーティングに行けなくなるとCさんは言っていた。それは「自分の病気の部分がさせて」いるのだと考えている(抜粋11の1行)。ダルクにつながってから「9年」になっても、退寮して仕事を続けていくことができていない。「怖い」(3行)のはダルクを退寮して離れていくことのようなのである。

Cさんは「サポートする立場」になるのが「自分のためにはなる」との考えを述べる(6-7行)。つまり、ダルクスタッフになることをほのめかしている。南はこれにたいしてやや驚いたような受け取りを発している(9行)。予期しなかったこととして受けとめている。

Cさんは、「同じことの繰り返し」から脱却するために、嘘をつかないようにしようと生き方を変えていた。それでも退寮して仕事を始めるとNAミーティングや仲間から離れてしまった。それで、仲間のなかでの生活を続けるためにダルクスタッフとなることを考えるようになっていた。

6 のらりくらしパターンが癖になる

本研究では施設移動を経験している薬物依存者4人にインタビュー調査をした。4人目が40代後半のDさんである。Dさんは、30代のはじめにダルクにつながって、ダルクとのつながりは15年以上となる。入寮したダルクも4か所以上にのぼる。Dさんとは70分以上にわたって話しを聞いたが、Dさんからは「同じこと繰り返してる」に類する表現は聞かれなかった。

それに近い表現が見られたのが以下の抜粋12である。

抜粋 12 のらりくらりパターンが癖に (Dさん)

- 1 D: であとはもう癖になってんですね, 外に出て使ったらダルクに行けばいいやっ
2 う, もう癖になってんですねよ. でまたいちからやり直しして, もうそのパターンを繰
3 り返していくとか, 1回でダルクをやってもう, なにかを感じて「もうクスリやめ
4 よう」って言って, 回復していくひと. このどっちかのふたつのパターンにはまって
5 いく, 俺はどっちかって言うとかこののらりくらりパターンのほうにいつてしまったと
6 いうのが僕の経験ですね.

抜粋 12 では薬物を使用してダルクに入寮するという「パターン」が述べられている。それが「癖」になっているひとたちがいるとDさんは述べる。「外に出て使ったらダルクに行けばいいやっという, もう癖になって」(1-2行)のひとたちである。

Dさんは、ダルク入寮者には「ふたつのパターン」(4行)があると見ている。上記が「のらりくらりパターン」(5行)である。もうひとつが、「1回でダルクをやってもう, なにかを感じて『もうクスリやめよう』って言って, 回復していくひと」(3-4行)である。そして、「俺はどっちかって言うとかこののらりくらりパターンのほうにいつてしまった」(5行)と自身の「僕の経験」を位置づける。

薬物を再使用してダルク入寮することは、「同じこと繰り返してる」という表現が指示している事態と同じである。それをDさんが「のらりくらりパターン」と呼び、「癖」になると表現していることは特徴的である。3-2項において「同じ過ちを何度も繰り返し」という表現が自助グループNAの「ベーシックテキスト」(Narcotics Anonymous 2006)に見られることを示した。Dさんののらりくらりパターンが癖になるという表現は、ある意味「同じ過ちを何度も繰り返し」という捉え方を拒否するものである。

ダルクが活用している12ステッププログラムはNAがAAから受け継ぎ発展させてきたものである。NAの「ベーシックテキスト」は12ステッププログラムをかたちにしたものである。そこに見られる表現を使わずに、独自の表現で自身の状態を表現するDさんは、12ステッププログラムをうまく受容できていない事例と位置づけることができる。

7 施設移動の先にある回復像

薬物依存者の施設移動経験を検討してきた。Aさんは、施設移動を勧められたときに「同じこと繰り返してる」と精神科の主治医に言われていた。Bさんは、覚醒剤の代わりにガスを使ったがその結果入院が必要になって「いっしょなんだ」と気づいた。Cさんは、懲役3回や4回のひとたちを見て自分も「繰り返し」となることを恐れ、再使用しての「同じことの繰り返し」から脱却するために嘘をつかないようにと決めていた。Dさんは、「同じこと」ということばを使うことはなく、「癖」になると表現した。

「同じこと繰り返してる」という表現とこれを使って示される気づきが、施設移動経験との関連で語られていた。これが、回復経験の重要な局面とそこでのワークを構成するものであることは間違いない

だろう。Bさんの場合は、施設移動につながる精神科病院入院時の気づきとして語られた。Cさんは、ダルクにつながる契機として、そして再使用して再入寮とならないための対策を取る理由として語られた。

Cさんはその後就職と退寮をするという経験を積み重ねた。だが、その試みが2回失敗に終わった。それで5-3項で見たようにダルクスタッフとなることを考えている。仲間のなかで生きるという選択肢である。ダルク退寮者の多くが選んできた生き方である(南・中村・相良編 2018)。

南は、薬物依存からの回復者のインタビューの最後に、目指す回復像を聞くことにしている。Cさんは、XダルクでスタッフをしているFさん「みたいになりたい」と言った。南が「Fさんの魅力はどこですか」(抜粋13の1行)とたずねた。その回答には、Cさんが回復した先にある「やりたい」姿をはっきりと見てとることができる。

抜粋13 スタッフ「Fさんみたいになりたい」(Cさん)

- 1 南: Fさんの魅力はどこですか。
- 2 C: うーん。まあ結婚もし、まあクスリ違いますけど、結婚もしてー、ま子どももいて。
- 3 南: なるほど。
- 4 C: で、資格も取ってダルクにいるあいだに。
- 5 南: なるほどなるほど。
- 6 C: でスタッフやって。
- 7 南: はいはいはい。
- 8 C: いまだにかかわり続けているじゃないですか。
- 9 南: なるほどなるほど。
- 10 (間)
- 11 C: やさしいですよ、あとね。
- 12 南: あ——。

「結婚もして」「子どももいて」(2行)、「資格も取ってダルクにいるあいだに」(4行)、「でスタッフやって」(6行)いる。Fさんは、ダルク退寮後に精神保健福祉士の資格を取得した¹⁰⁾。そのうえでダルクスタッフをしている。結婚して子どももいる。それを長期間継続してダルクと「いまだにかかわり続けている」(8行)。さらに「やさしい」人柄である(11行)。

施設移動を契機としてCさんは「同じことの繰り返し」からの脱却をはかってきた。Cさんはさらに、ダルクスタッフになることで回復をすすめていくことを考えている。やりたい姿であるFさんの生き方と人柄がめざす回復像となっていた。

10) Cさんは、Fさんが資格を取得したのはダルク入寮中だったと誤解しているようである。

引用文献リスト

- Alcoholics Anonymous, 1939, *Alcoholics Anonymous*, Alcoholics Anonymous.
- Crabtree, Andy, Mark Rouncefield, and Peter Tolmie, 2012. *Doing Design Ethnography*, Springer.
- ダルク編, 2018, 『ダルク：回復する依存者たち』明石書店.
- ダルク研究会編, 2013, 『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎.
- Francis, David and Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. Sage. (中河伸俊他訳, 2014, 『エスノメソドロジーへの招待：言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版.)
- Garfinkel, Harold, 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Goffman, Erving, 1974. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harvard University Press.
- 池谷 のぞみ, 2019, 社会課題とエスノメソドロジー研究との関わり：救急医療におけるワーク研究を中心に, 『年報社会学論集』32：12-22.
- 串田 秀也；平本 毅；林 誠, 2017, 『会話分析入門』勁草書房.
- McQ, Joe, 2005, *The Steps We Took*, August House. (依存症からの回復研究会訳, 2008, 『回復の「ステップ」：依存症から回復する12ステップ・ガイド』依存症からの回復研究会.)
- 南 保輔, 2008, 徹子が黙ったとき：テレビトーク番組の相互作用分析, 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』(20)：1-76.
- 南 保輔, 2014, 断薬とスピリチュアルな成長：薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性, 『成城文藝』(227)：62-42.
- 南 保輔, 2015, ダルクスタッフとしての回復：薬物依存者の「社会復帰」のひとつのかたち, 『成城文藝』(232)：74-47.
- 南 保輔, 2018, スタッフを続けるのもおまかせ：ダルクスタッフAさんのライフヒストリー, 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』(29)：13-40.
- 南 保輔, 2019, 薬物依存者リハビリテーション施設におけるSMARPP：フィールド調査に見られる効果, 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』(30)：13-34.
- 南 保輔, 2021, 国境をまたぐ依存からの回復：薬物依存からの回復におけるワークの研究, 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』(32)：37-51.
- 南 保輔；中村 英代；相良 翔編, 2018, 『当事者が支援する：薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2』春風社.
- Minami, Yasusuke and Mitsuhiro Okada, 2020, "Narcotics Anonymous Members in Japan and the No Cross-Talk Rule: The Practice of Telling Your Own Story," Paper presented at the 115th American Sociological Association Annual Meeting.
- Narcotics Anonymous, 2006, 『ナルコティックスアノニマス』第五版日本語翻訳版, Narcotics Anonymous World Services.
- Narcotics Anonymous, 2012, 『ステップワーキングガイド』日本語版, Narcotics Anonymous World Services.
- 西阪 仰, 2008, トランスクリプト(転写)の記号一覧, 西阪ほか『女性医療の会話分析』文化書房博文社, 9-13.
- 岡田 光弘, 2019, 「社会学1.0」「社会学2.0」vs.「社会学0.0」「社会学1.5」：ウィンチェンシュタイン派の「観

察社会学」という視点から、『新社会学研究』(4): 69-81.

岡田 光弘, 2021, エスノメソドロジー研究は、「三人称」の現象学なのか——「実践学」としての「観察社会学」序説, 『コミュニケーション紀要 (成城大学大学院文学研究科)』(32): 1-14.

Sacks, Harvey, 1992, *Lectures on Conversation*, Basil Blackwell.

Sudnow, David, 1965, Normal Crimes: Sociological Features of the Penal Code in a Public Defender Office, *Social Problems* 12(3): 255-276.

Thomas, William Isaac, 2019, 1923, *The Unadjusted Girl: With Cases and Standpoint for Behavior Analysis*, Kindle, Good Press.

付抜粋

付抜粋1 Aさんの薬物使用

1 A: もう、正直あのおう、なんだろうなあ。けっこう使うのも限界が来ちゃってるなってい
2 う。幻覚も出ちゃったし。あとその、けっこうまわりのひとのなんか期待に、期待じゃ
3 ないですけど、あんまり悲しませたくないなっていう思いがあって。(聞き取り不能)
4 けっこうその、回復、自分がこう回復するようにこう、みんな助けてくれるっていう
5 か、いろいろお世話になってるので、なんかこう台無しにたくないなっていう思い
6 はあるんですけど。

7 南: そのう、もうあんまり、うまく使えなくなったよ

8 A: もうちょっと、うまく使えないというかあのおう。もう何回も、今度こそはうまく使え
9 るなと思って、何回もトライしたんですよ。ことごとく、まあ何回ぐらいいかなあ、
10 けっきょく最終的にはおかしくなっちゃって、で、また入院して、そっからダルク。
11 その無限ループにはまっちゃってて。もうどうやってもうまく使えないんだなってい
12 うのは自分のなかでわかってきたっていうか。わかってるかどうかちょっとこわいん
13 ですけど。(間)

14 E先生(Aさんの主治医)のほうもPのダルクに行って環境変えてやったほうがいいっ
15 ていうことをいってたんで、毎回同じこと繰り返してるんで、もうちょっと。1回仕
16 切り直したほうがいいみたいな、そんな話をちょっとされてて、でえその、E先生と
17 まあQ(Qダルク施設長)さんと話して、で、親もそういう意向だったんですよ。

付抜粋2 施設移動後の生活と取り組み姿勢の変化(Bさん)

1 南: そうですか。で、来てみてどうですか。

2 B: 来てみて、まあですね。まだん、最初のころよりかはもう、欲求もはいらなくなって。
3 まあ今とまってますよね、はい。クスリの欲求。

4 南: ふーん。ここはプログラムが多くて忙しいみたいですけど。

5 B: んー、まそうですね。だから1日たつのがやっぱ早くて。なんだろう。むこう、Y

- 6 《ダルク》にいるころよりは、こう早くこう、なんだろうなこう。頭もはたらくよう
7 になったり。すこしぼけてたのも、やっぱり動きながらなんで。寝てるよりは、寝て
8 ミーティングだけっていうよりは、一日中役割で動いたり。ま太鼓やったり音楽
9 やったりしてるんで、わりかし早いかもしれないですね、こう。
- 10 南： たのしいですか。
- 11 B： んーまたのしいか、んー。《間》ま、たのしくはないかもしれない。たのしくはないか
12 もわかんないけど、ん。でもま、なんだろうな。まこれ、ここがたぶん一番いいな、
13 いいとは思うんですよね。いろいろあって、やってて。
- 14 南： ん、ん。
- 15 B： でこれ、ここで楽しめない、と、やっぱりまずいっていうふうに思うし。これ以上の生
16 活はたぶんない、ないから。仲間も多いし。まあなんかこう。までも2回目だね、やっ
17 ぱやり直して来てるんで、あのう。今回はけっこうこう、うーんちゃんと考えてやっ
18 てるっていうか。なんかなんとなくダラダラといてえ、退寮すればいいやっていうの
19 から、とはちょっと、内容が変わったかもしれないですね。なんか、プログラムを取
20 り組み姿勢とか、
- 21 南： あ――
- 22 B： なんかそういうのはやっぱり自分の意思でこう、ね。
23 《どこかでなにかの呼び出し音が鳴る》
- 24 B： そのまえまでは、連れてこられたとか。
- 25 南： あ――
- 26 B： ちょっと退寮したら使いたいとかそういうのもあったすけど、やっぱり2回も入寮にな
27 ると、ん。ん――もうちょっとダルクはもういいかなと思って。やっぱり思う。クス
28 リがね、抜けてくるとね、やっぱりそう思うっていうか。やってくるしいときは助けて
29 ほしいと思うけど――
- 30 南： ふーんふーん。そうですね。

Transferring Facilities to Avoid “Repeating the Same Things” : A Study of Recovery Work from Drug Addictions

Yasusuke Minami (Seijo University)
yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

The Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC) operates facilities all over Japan and provides recovering drug addicts with beds and a twelve-step recovery program. The cases of four male drug addicts who had ever being transferred from one facility to another were examined through interviews with the addicts at their current facilities. Two groups of research questions were raised. The first group comprised two questions: What events and experiences do compose transferring facilities? In accounting for the process of transferring facilities, how is the expression of “repeating the same things” used? The second group comprised two questions: What are the changes and consequences of transferring facilities? How do recovering addicts express those changes and consequences?

Three addicts used versions of “repeating the same things” in talking about their transfer across facilities. Mr. A was told explicitly that he needed to transfer facilities to avoid “repeating the same things.” Mr. B tried a substance other than methamphetamine which he had become addicted to and found that “the same” disastrous outcome had occurred. Mr. C decided to enter the first facility for the first time after he was arrested for the second time and met other people who had been incarcerated for the third or fourth time. He also said that he had stopped lying to avoid “repeating the same things” after he moved from the first DARC facility to the second one. In contrast, Mr. D, the fourth recovering addict, did not use expressions similar to “repeating the same things” but instead said that a “temporizing” pattern had become his habit.

In conclusion, the image of Mr. C’s recovered role model is presented; he aspires to become like Mr. F, a DARC staff member, who is married and has children. Mr. F had become a psychiatric social worker after he became a DARC staff member. Mr. C realized that becoming a staff member is critical for his recovery.

KEYWORDS: drug addiction, recovery work, DARC staff, “repeating the same things”